中國學藝叢書

牧角悦子

中国古代の祭祀と文学

創文社刊

牧角 悦子

中国古代の祭祀と文学

創文社刊

〔まきずみ・えつこ〕 本名竹下悦子．福岡市生まれ．九州大学文学部，同大学院文学研究科博士課程（中国文学専攻）中退．九州大学文学部助手，二松学舎大学文学部講師・助教授を経て，現在同大学教授．
〔主要論著〕『列女伝―伝説になった女たち―』（明治書院），『詩経・楚辞』（共著，角川書店），『詩経』上・中（共著，明治書院・新釈漢文大系），「『論語』の中の鬼神―呪術から儒術へ―」（『二松学舎大学論集』第46号），「中国神話学の夜明け―近代中国の学術と顧頡剛・聞一多の古代学―」（日本聞一多学会報『神話と詩』第2号），「『詩経』の中のエロス―桃の夭夭たる―」（二松学舎大学『東洋学研究所集刊』第34集）など．

中国学芸叢書
（13）

〔中国古代の祭祀と文学〕

二〇〇六年一〇月五日 第一刷印刷
二〇〇六年一〇月一〇日 第一刷発行

著者 牧角悦子
発行者 久保井浩俊
発行所 株式会社 創文社
東京都千代田区麹町二―六―七
〒101-0083 ☎03-3262-0911

精興社印刷
鈴木製本所

ISBN4-423-19415-5
Printed in Japan

目次

序章　原始の混沌——古代への視点

一　太古の森　五
二　古代という視点　六
三　経学とは　一〇
四　文学における古代の意味　一七

第一章　神々の時代

I　古代人の自然崇拝とその終焉　二三
一　怪力乱神　二三
二　共存する諸族の神々——商（殷）王朝時代　二四
三　聖山としての首陽山　二八
四　一本足の怪獣「夔」　三二
五　神意から人為へ——周王朝時代　三六

六　古代の終焉　四二
II　古代神話の世界　四六
一　神話の断片　四六
二　神話の体系化　四八
三　開国始祖神話　五〇
四　天地開闢神話　五五
五　自然の神々　六〇
六　龍の伝説　六七
七　崑崙神話　七二
III　「詩」の意味するもの　七三
一　歌謡の発生　七四
二　「詩」の意味するもの　七八
三　古代的〝詩〟の変容　八四

第二章　うたのはじめ——『詩経』

I　『詩経』の成立と解釈史　九〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　『詩経』の成立　九〇
二　漢代の三家詩と毛詩　九一
三　古注　九二
四　新注――朱熹の『詩集伝』　九三
五　清朝考証学　九五
六　『詩経』の原義的研究　九六
七　古代歌謡としての『詩経』　九七
Ⅱ　祝祭歌としての『詩経』　一〇〇
一　詩の六義――『毛詩』大序による　一〇〇
二　「風」「雅」「頌」とは　一〇三
三　興について　一〇五
Ⅲ　『詩経』諸篇の解釈　一一三
一　周南・召南――二南　一一三
二　降臨する祖霊　一一四
三　関関たる雎鳩――諸篇の綴合　一一八
四　草摘みの祈願　一一三

五　投果の習俗　一三二
六　変風の諸篇　一三五
七　葬送と鎮魂の歌　一三六
八　羽を掲げる万舞の舞い　一四二
九　水神の降臨　一四六
一〇　鄭衛の風　一四八
一一　うたのはじめ　一五七

第三章　霊魂再生の祈り――『楚辞』

Ⅰ　『楚辞』の成立とその背景　一六三
一　二つの『楚辞』　一六六
二　王逸と『楚辞』　一六九
三　『楚辞』と屈原　一七一
四　屈原伝説からの脱却　一七三
五　『楚辞』の全体像　一七五
Ⅱ　『楚辞』諸篇の解釈　一八一

一　神霊との饗宴――九歌「東皇太一」「礼魂」　一八一
二　思慕と落胆――九歌「湘夫人」　一八六
三　苦悩する魂の遍歴――「離騒」篇　一九三
四　天界への遊行　一九五
五　時間の推移と老いの嘆き　二〇二
六　さらなる飛翔　二〇五
七　霊魂再生の祈り　二〇九

終章　呪術の終焉と抒情詩の誕生

一　詩と抒情　二一五
二　原始の混沌――古代文学の難しさと魅力　二一七
三　呪術の終焉と抒情詩の誕生　二二〇

参考文献　二二五
あとがき　二二七
索　引　1～5

中国古代の祭祀と文学

序章　原始の混沌——古代への視点

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

無物の象、是を惚恍という。
――実体はイマージュの中にある。
『老子』十四章

一　太古の森

季節の変わり目に森の中を歩くと、ふとした瞬間に不思議な気配を感じることがないだろうか。梢をわたる風の音や、湿った土の匂いに誘われるように、見ることも触れることもできないけれど確かにそこにあるものを体が感じる瞬間、それは木霊との出会いかもしれない。喧騒の渦巻く現代生活の中にあって、日常の空間の中ではあまりにも無縁になってしまった木霊との語らいは、しかし風の吹く静かな夜や雨あがりの爽風の中に突然甦ることがある。そしてそれは太古の記憶につながっている。

太古の森、そこには木霊が生きていた。そして人々の内なる感性は森の息吹と深くつながっていた。彼らはそこにいくつもの生きた神々を、幻想としてではなく実体として感じ取ることができた。それらはあるいは動物の形をして立ち現れ、あるいは鳥の姿でさえずり、ときには人々に恵みを、またときには災いをもたらした。

古代の祭祀とは、人々がそれらの神々を祭ることによって、自らの幸福を強く願う場としてまず始まった。

祭りが行なわれるのは夜。篝火（かがりび）に照らされた中庭の中央に、土が高く盛られる。それは日常と

次元を異にする特別な空間なのである。巫子は一本の樹木を手にし、それを振りかざして舞い踊るうちに、いつしか恍惚の境地に至る。神霊はそこに舞い降り、巫子の体と口を借りて、祭る人々に呪言を告げる。一段の神聖な時間が流れたのち、人と神はいっしょになって、歌と踊りと、そして捧げられた多くの供物を共にしつつ饗宴の中に夜を明かすのである。

人が言葉を持たない時代、祈りは感嘆詞として発せられた。感情の高まりの極点で発せられた「啊」「猗」「兮」という感嘆詞は、いまだに歌と詩の世界にその姿を留めている。言葉が生み出されて以降、祈りは抑揚を伴った言辞の発声へと進化する。しかし神を呼ぶ祈りの言辞は日常の言語と同質のものではありえない。言葉そのものの中に祈りと呪詛とが込められているという意味で、それは特別な発声であり、また呪術的言辞であった。そしてそれが詩の原点であり、そして文学の原点であった。

古代における文学の発生は、このように神と人との交流の中で、呪術的言語として生まれたものであった。

二　古代という視点

中国近代に聞一多（一八九九～一九四六、図1）という詩人がいた。清朝末期に湖北省の旧家に

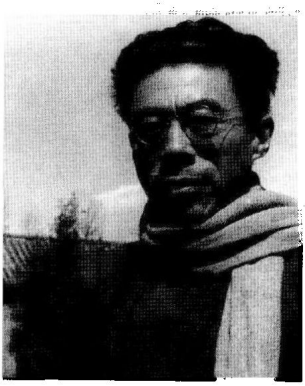

図1　1945年の聞一多

生まれた彼は、民国元年（一九一二）に北京の清華学校に入学し、米国式の新しい教育を受ける。卒業後アメリカに留学し、美術を学んだのち、文学を志して帰国。近代詩壇のリーダーとして活躍する。しかし三十歳を前に詩作をきっぱりと止め、古典文学研究に没頭し始める。最晩年は、日中戦争を背景に湧き起こった民主運動の渦中に自ら飛び込み、四十八歳で国民党の特務に暗殺されるという劇的生涯を送った。

中国の古代文学を語るのに、なぜ民国の詩人聞一多を持ち出したのかというと、それは聞一多こそ、ある意味で中国の「古代文学」を「再発見」した人であったからだ。

古代という時代を、無知蒙昧な野蛮で未文明の時代とみなしたり、あるいは反対に「神代（かみよ）」として神聖視し、汚すべからざる理想郷と仮定したりする歴史観は、中国に限らず前近代的視点として我が国にもあった。それに対して、古代という時代を、現代とは異質な、しかし同等の価値を持った一つの時代であると考える視点は、実は非常に新しい。それは西欧における古代史研究の発展と関連する。十九世紀末、ドイツ人シュリーマンによってトロイ遺跡が発掘された。続いてツタンカーメン王墓、モヘンジョダロ遺跡などが次々と発掘された。これらの世紀的大発見は、それまで神

話伝説の世界の出来事だと考えられていた物語が、実は歴史として存在したのだということを人々に知らしめた。同じ頃中国においてもまた世紀的大発見があった。殷墟の発掘である。三皇五帝・古の聖王への回顧的歴史観が大勢を占めていた中国の歴史認識に、殷墟からの出土物は決定的「事実」をつきつけたのである。殷は神話上の聖なる時代から、歴史上の古代王朝へと変わった。このように、文献によって語られ、のちの国家の権威によって美化され神聖視されていた「古代」という時代は、この時はじめて歴史の一部として再認識されたのである。これら西欧に始まる古代史研究の隆盛、中国における文物の発掘を通じて、新しい歴史観が生まれ、国家や神の権威から自由であろうとした近代学術が確立する。古代に対する新しい視点は、この過程の中から生まれてきたものであった。

古代が、現代とは等価の、しかし全く異質な文化を持つものであるという視点は、中国の学術界に大きな影響を与えた。儒家の経学的視点（後述）から解き放たれた若い知性たちは、この時期様々な角度から自国の古典に向き合うことになる。中でも聞一多は、その詩人的感性において、古代という異次元空間に最も強く引かれた学者の一人であった。『詩経』『楚辞』という中国古代文学の二つの精華を、古代歌謡として再解釈したばかりでなく、古代という時代そのものに熱い視線を注ぎ続け、多くの優れた古代研究を残したのである。

聞一多の古代研究は、詩経研究・楚辞研究・神話研究の三つがその中心である。このうち詩経研

究において、彼はまず『詩経』を生み出した古代という時代そのものの究明から始める。神々が生きて存在した古代という時代、その神々に希求する人々の祈りの根本にあるのは、五穀豊穣と子孫繁栄という人間の最も根源的な欲求であったこと、そしてそれは人の原始の本能をまっすぐに肯定するものであった、と一多は言う。「詩経の性欲観」（一九二七年）の中では、『詩経』に歌われた愛の詩篇が、いかに濃厚なエロスを内在させていたかを詩情豊かに再現してみせる。

次に楚辞研究（「楚辞校補」「怎様読九歌」「什麼是九歌」等）において、聞一多は『楚辞』の本質が宗教的歌舞劇であったことを立証する。また『楚辞』の中でも特に「九歌」の諸篇は、自然の神と人間とが一体となって歌い舞い踊る壮大な「演劇」であったことを、歌舞演劇そのものの本質との関連の中から解き明かそうとした。

さらに、神話研究においても、伏羲（ふつき）・女媧（じょか）など古代の様々な神々の物語が、古代の習俗と深い関係を持ち、それが世界的普遍性を持ちながらも中国独自の発展を遂げた様相を跡付ける（「高唐女神伝説之分析」「伏羲考」等）。

これら聞一多の古代学は、三皇五帝を神聖視する経学的視点からも、また歴史進化論の立場から古代を後進的無知蒙昧の時代としてみる視点からも完全に脱却した、極めて新鮮でそして鋭い学術研究である。とりわけ重要なのは、古代という時代を聞一多が、すべての芸術を生み出す巨大な混沌としてとらえていたことである。歌謡も舞踏も演劇も、人々の神々への祈りとそれを通した一体

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com